

平成 21 年 5 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005～2008

課題番号：17520260

研究課題名（和文） 現代フランス語における事態の主観的把握の方策の研究

研究課題名（英文） The Studies on Strategies of Subjective Representaiton of Events in the Modern French

研究代表者

春木 仁孝 (HARUKI YOSHITAKA)

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授

研究者番号：00144535

研究成果の概要：

当研究では主としてフランス語の動詞の時制形式、中でも単純過去と複合過去を対象として、事態の把握における主観的観点の現われ方、および主観的把握と客観的把握の交代などの現象について研究を進め、時間的な距離が心理的な距離にメタファー的に拡張された結果、複合過去と単純過去が事態把握における主観性の違いを表わすようになったという結論を得た。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	900,000	0	900,000
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,000,000	420,000	3,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：主観性、客観性、事態把握、時制形式、半過去、複合過去、単純過去、スキヤニング

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 平成 14 年度～16 年度に「現代フランス語のテンス・アスペクト体系と事態の主観的認識との関係についての研究」という課題で科学研究費補助金（基盤研究(C)）を受けて、フランス語の様々な時制と事態の主観的方策について考察を行った。なかでも半過去については事態把握の方策としての観点からの研究を一通り終えた。その次の段階として、特に複合過去と単純過去に関する研究を進め、いくつかの資料の分析によりある程

度その方向性が見え始めたところであった。そのような研究状況であったので、さらに複合過去と単純過去の機能についての分析と考察を行う必要があった。

(2) 本国フランスにおいては半過去に関しては多くの研究が行われているが、複合過去と単純過去に関しては散発的な研究はあるものの、総合的な研究、特に両者の使い分けを説明できるような原理を明らかにした研究は未だ存在しなかった。それぞれの時制の特徴付けやその機能については時制に関

するモノグラフなどにも記述はあるが、それらは時制の体系の中での個々の時制の役割をマクロなレベルで規定しているものの、具体的な例を前にしたときに常に有効な説明を与えることが出来るような、発話産出行為(acte d'énonciation)の観点を十全に取り入れた説明は存在していなかった。

(3) そのような背景の中で、現代フランス語の書かれたテキストにおける単純過去と複合過去が同一テキストに併存する場合のそれぞれの時制の使用を説得的に説明できるような原理を探る必要性があった。

(4) それと同時に、フランス語における事態の主観的把握の方策を時制以外の領域にも広げて考えるための予備考察も開始することも計画していた。

(5) 研究を進めるに当たっては、かなり整備されてきた認知言語学の考え方を積極的に取り入れることで、事態の主観的把握という現象をこれまで以上に明らかに出来るのではないかと考えていた。

(6) そうすることで、現代フランス語における様々な現象の分析と考察だけでなく、英語圏を中心に発展してきた認知言語学の手法の有効性の検証ということも視野に入れることが出来るのではないかとこの予測も持って研究を開始した。

## 2. 研究の目的

(1) 主として複合過去と単純過去に焦点を絞り、事態把握の方策としての両時制の固有の機能を探るとともに、同一テキスト中でのこの二つの時制の用いられ方を分析して、事態の主観的把握という観点からこの二つの時制がどのような基準で使い分けられているかを探り、そこから事態把握の方策として見たときのこの二つの時制の機能を解明していくことを主要な目的としていた。

(2) また、認知言語学の成果を取り入れつつ、文法化、スキミング、メタファー、メトニミー、スキーマといった原理を援用して、時間的な用法がどのようなメカニズムによって、事態把握の方策として発展して現在に至っているのかについてもある程度明らかにすることも目的としていた。

(3) また、時制以外の領域にも事態の主観的把握の方策を考える予備的な研究も行いたいと考えていた。具体的には、過去にある程度の研究を進めたものの、認知言語学的な視点を十分には取り入れてなかった再帰構文受動用法についての研究を再開して、先ず再帰構文受動用法の表すモダリティーに関する問題についての再考察にとりかかると考えていた。

## 3. 研究の方法

研究の背景・目的のところでも述べたこと

からも予測出来るように、性急な理論化に走るのではなく、あくまでも具体的なテキストにおける実際の用例を対象にしたいわばミクロな分析から出発して、まず綿密にそれぞれの時制の使われている局所的な意味を明らかにして、そこから発話者の事態把握における意図、即ち発話産出行為的な観点からの一般化を目指すという手法を採用した。

複合過去が発話時の発話者に密接な関係を持っているということは、既に1966年のバンヴニストの論文で指摘されているが、しかし個々の具体的なテキストにおける単純過去と複合過去の交代や、複合過去主体のテキストもしくは単純過去主体のテキストに単発的にもう一方の時制が用いられているときに、それを単に複合過去を含む文によって表された事態が発話者とより密接な関係を持っているからであると説明するだけでは何も説明したことにはならない。それ故、様々な実際のテキストにおける具体的な用例を分析することで、具体的な使用を説明できるような原理を追求するという方法を採用した。

分析対象としては、単純過去主体のテキスト、複合過去主体のテキスト、両者が共に用いられているテキストをそれぞれ分析した。一部にはサンテグジュペリのように半世紀以上前のテキストにおける例にも言及したが、原則として20世紀後半以降の現代フランス語における状況を明らかにすることが目的であるので、おおよそ1990年代以降のテキストを分析対象とし、またジャンルとしては現代小説と、自伝、補助的にノンフィクションのテキストを分析した。

個々のテキストをミクロに分析したときに抽出した要因を、認知言語学的な観点を取り入れて、より一般化できる原理に最終的には総合するという方法をとった。

## 4. 研究成果

本研究では、筆者がこれまで色々なテキストにおいて見てきた複合過去と単純過去の使い分けが、結局は春木(2004)で提案した、心理的領域と外部世界という区別によって説明できることを確認した。心理的領域の事態というのは、語り手に取って何らかの意味でより重要であり、主観的に把握されて主観的ニュアンスをともなって提示されたコメントの事態のことである。一方、外部世界に属する事態というのは、スキミングによって外側から、確定された事態として客観的に捉えられ提示された事態である。この場合、語り手が経験する事態や語り手の行動であっても、心理的距離が遠く、単に継起的な事態の一つとして把握・提示されるときは心理的領域外の事態として単純過去が用いられる。主語が語り手で動詞も全く同じでありな

がら、複合過去と単純過去が使い分けられている場合があるのを見れば、二つの時制の使い分けはあくまでも事態の把握・提示の仕方の問題であることが分かる。発話空間の語り手にとってより重要で、より関わりのある過去の事態は、あくまでも発話空間から捉えられている。そうでない事態は、発話空間から切り離された過去の事態として捉えられている。起源的には、時間的により発話空間に近い事態が複合過去で、時間的により遠い事態が単純過去で述べられていたということが出来る。この時間的な距離の差が、いわば心理的な距離の差にメタファー的に投射された結果として、現在の複合過去と単純過去の機能が発達してきたと考えられる。

複合過去が表わす継続や経験というのは、もちろん時間的にも語り手の現在につながっている。しかしそれらの事態が語り手の今において意味を持つということは、それらの事態が語り手にとってより重要で心理的な距離が近いということである。そのような場合にもより関与的なのは、時間的な距離が近いことではなく心理的な距離が近いことなのである。

さらに付け加えるならば、複合過去による事態の主観的な把握と提示というのは、事態そのものの提示よりも、その事態の提示を通して語り手の何らかの感情や気持ちを表わすことにより重点があると言える。言い換えるならば、コメントとしての事態の提示ということができるであろう。

(1) La localisation côtière de la ville de Khu Bua, dans l'actuelle province de Ratburi, a certainement *contribué* à lui donner une position de premier ordre au sein des réseaux commerciaux qui *se mirent* très tôt en place dans la région.

例(1)は、ある展覧会におけるタイのある地方の歴史的説明を述べたパネルのテキストである。複合過去と単純過去がそれぞれ1例ずつ見られる。内容から分かるように *se mettre* が歴史的な事実を述べているのに対して、*contribuer* の方は *certainement* という副詞の存在が示しているように、判断を含む主観的なコメント的事態を表わしている。この文はあくまでも語り手が発話空間において過去の事態を措定しているのであり、交易ネットワークの成立は歴史的な事実として既に確定している事態を、過去の事態のストックの中からスキヤニングによって取り出してきて提示しているに過ぎない。

上で、過去の事態のストックという言い方をしたが、より正確には確定した事態のストックというべきである。周知のように、未来のことを語る SF においても単純過去が用いられる。それは、語りの時点から見て過去のことだからという説明がなされる。しかし、

より厳密には、単純過去が表わしているのは語りの時点に先行する時点において既に確定した（と見なされる）事態である。スポーツや何かの実況中継のような場合ではなく、何か出来事を語るということは基本的には既に成立した事態を語るということである。このように考えれば、語りであることが明らかかな文脈では、語りに用いられる時制には過去という特性はそれほど重要ではないことになる。むしろ重要なのは確定した事態を語るという特性である。このように考えれば、現代フランス語の語りにおいて現在形が多用されることも理解できる。単純過去に比べれば現在形は現在の未完了的な事態を表わすことも出来るので、文脈が無ければ曖昧性があるが、過去の事態を語るために用いられるときには、それが語りであることは基本的には分明である。筆者が何度も時制の説明原理としてその不十分さを指摘してきたライヘンバッハ式の説明では、単純過去の場合に参照点 RP がどこにあるのかが問題にされる。よくある解決案が、参照点は事態発生時点と同じであり、事態の推移と共に移動していくという考えである。たとえライヘンバッハに与するにしても、この考えでは参照点の意味が無くなるであろう。筆者はライヘンバッハ式の参照点というような考え方は取らないが、単純過去の場合、スキヤニングする主体は（過去の）確定した事態のストック全体と対峙しているのである。その際、主体は発話空間の外にあって、時空的な制約からは自由になっていると考えられる。

記念碑的な論文と言える Benveniste (1966) の “Le parfait (= passé composé, Y.H.) établit un lien vivant entre l'événement passé et le présent où son évocation trouve place.” (p.244) という一節は、既に複合過去の本質を捉えていたと言える。しかし、個々のテキストにおける複合過去と単純過去の使い分けやその文体的効果については、具体的な分析が必要であった。また、彼が立てた *histoire* と *discours* という区別もあまりにも図式的であった。筆者は、一連の研究において具体的な分析を通してこの二つの時制の本質的機能を認知的な観点から明らかにすることに努め、その文体的効果についても詳しい記述を行なって、同じテキスト内における二つの時制の使い分けの原則を明らかにした

[参照文献]

Benveniste, E. (1966) : “Les relations de temps dans le verbe français”, in *Problème de linguistique générale*, 1, Paris, Gallimard.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 8 件)

- ① 春木仁孝「事態の主観的把握について」『言語における時空をめぐって VI』(言語文化共同研究プロジェクト 2007) (大阪大学大学院言語文化研究科) pp.31-40.(2008) 査読無し
- ② 春木仁孝「スキャニング操作と単純過去」『言語文化研究』第 33 号 (大阪大学大学院言語文化研究科) pp.81-101.(2007) 査読有り
- ③ 春木仁孝 "L'imparfait : temps attributif", *Actes de XXIVe Congrès International de Linguistique et de Philologie romanes*. Max Niemeyer Verlag, pp.541-549. (2007) 査読有り
- ④ 春木仁孝「フランス語の再帰構文受動用法におけるモダリティーについて」『言語における時空をめぐって V』(言語文化共同研究プロジェクト 2006) (大阪大学大学院言語文化研究科) pp.31-40. (2007) 査読無し
- ⑤ 春木仁孝 "Le passé simple et le passé composé : sphère subjective et univers objectif", *Cognition et émotion dans le langage*, Keio University, pp.25-40. (2006) 査読無し
- ⑥ 春木仁孝「自伝における過去形の用法について」『言語における時空をめぐって IV』(言語文化共同研究プロジェクト 2005) (大阪大学大学院言語文化研究科) pp.31-40. (2006) 査読無し
- ⑦ 春木仁孝「古フランス語における物語的現在と半過去についての序章」シュンボシオン (高岡幸一教授退職記念論文集) (朝日出版社) pp.33-42.(2006) 査読無し
- ⑧ 春木仁孝「緩和表現の半過去について」『言語における時空をめぐって III』(言

語文化共同研究プロジェクト 2004) (大阪大学大学院言語文化研究科) pp.31-40. (2005) 査読無し

[学会発表] (計 2 件)

- ① 「Ce fut ma première rencontre avec le passé simple.—スキャニング操作と単純過去—」日本フランス語学会第 233 回例会 (於: 東京大学 (駒場)、2006 年 6 月 24 日)
- ② 「古フランス語における時制について —半過去、物語的現在、単純過去など」【シンポジウム】「時・相・法: フランス語・ドイツ語・スペイン語の対照的観点から」日本フランス語学会第 230 回例会 (於: 東京大学 (駒場)、2005 年 12 月 17 日)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

春木 仁孝 (HARUKI YOSHITAKA)  
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授  
研究者番号: 00144535

(2) 研究分担者  
なし

(3) 連携研究者  
なし